

195 ピラトによる2回目の裁判(イエス、死刑の判決を受ける)

ヨハネによる福音書 18 : 39~19 : 16

194 ヘロデによる尋問 → ⑥

↓ イエス、ヘロデからピラトのもとに戻される

195 ピラトによる2回目の裁判(イエス、死刑の判決を受ける)

▶ヨハネによる福音書 18 : 39~40

39 ところで、過越祭にはだれか一人をあなたたちに釈放するのが慣例になっている。あのユダヤ人の王を釈放してほしいか。」 → ⑦ (ピラト)

→マタイによる福音書 27 : 19

一方、ピラトが裁判の席に着いているときに、妻 (→伝承では「クローディア」) から伝言があった。・・裁判の中断・・
「あの正しい人に関係しないでください。その人のことで、わたしは昨夜、夢で随分苦しめられました。」

40 すると、彼らは、「その男ではない。バラバを」と大声で言い返した。バラバは強盗であった。

→バラバ=バル (息子) +アバ (よく知られた父)

本名：イエッシュア・バル・アバ

→強盗：ギリシア語では「レイステイス」が使われている。

=反逆者、愛国心を隠れ蓑にして暴力行為等を行う者たちのリーダー

- ①：ファイル No.188 を参照 (ゲツセマネ) 金曜日真夜中
- ②：ファイル No.190 を参照 (アンナス) //
- ③：ファイル No.190 を参照 (カイアフア) //
- ④：ファイル No.192 を参照 (最高法院) 土曜日朝一番
- ⑤：ファイル No.193 を参照 (ピラト) 土曜日早朝
- ⑥：ファイル No.193 を参照 (ヘロデ) //



出典(図):パイブルガイド(いのちのこば社):地名等は口語訳表記

▶ヨハネによる福音書 19 : 1~16

01 そこで、ピラトはイエスを捕らえ、鞭で打たせた。

→ピラトはイエスを鞭打ちにし、その血を見せれば群衆は満足し、釈放できると考えた。

→申命記 25 : 3

四十回までは打ってもよいが、それ以上はいけない。それ以上鞭打たれて、同胞があなたの前で卑しめられないためである。



| タイトル(書名) | 章:節 聖句 [検索対象総数 : 4 / 聖句等の総数 33250] | 聖書Navi Active 393128091 (新共同訳) |
|-------------|--|-----------------------------------|
| K 申命記 | 25:2 もし有罪の者が鞭打ちの刑に定められる場合、裁判人は彼をうつ伏せにし、自分の前で罪状に応じた数だけ打たせねばならない。 | |
| K 箴言 | 19:29 不遜な者に対しては罰が準備され／愚か者の背には鞭打ちが待っている。 | |
| S マタイによる福音書 | 20:19 異邦人に引き渡す。人の子を侮辱し、鞭打ち、十字架につけるためである。そして、人の子は三日目に復活する。」 | |
| S マタイによる福音書 | 23:34 だから、わたしは預言者、知者、学者をあなたたちに遣わすが、あなたたちはその中のある者を殺し、十字架につけ、ある者を会堂で鞭打ち、町から町へと追い回して迫害する。 | |

02 兵士たちは茨で冠を編んでイエスの頭に載せ、紫の服をまとわせ、03 そばにやって来ては、「ユダヤ人の王、万歳」と言って、平手で打った。

04 ピラトはまた出て来て、言った。「見よ、あの男をあなたたちのところへ引き出そう。そうすれば、わたしが彼に何の罪も見いだせないわけが分かるだろう。」

05 イエスは茨の冠をかぶり、紫の服を着けて（見るも無残な姿で）出て来られた。
ピラトは、「見よ、この男だ」と言った。

→見よ、この男だ＝エッケ・ホモ（ラテン語、 Ecce homo エッケ・ホモー）

06 祭司長たちや下役たちは、イエスを見ると、「十字架につけろ。十字架につけろ」と叫んだ。

ピラトは言った。「あなたたちが引き取って、十字架につけるがよい。わたしはこの男に罪を見いだせない。」

→祭司長たちは最高法院に属する議員で、祭司職に就き、ファリサイ派や他の指導者たちに影響力を持つユダヤ教教師でもあった。ローマ帝国は最高法院に、ユダヤ人に関わる慣習、特に宗教に関する決定権を与えていた。下役は神殿を守り、ユダヤ人指導者会議（最高法院）が民衆を統治するのを助けた。

07 ユダヤ人たちは答えた。「わたしたちには律法があります。律法によれば、この男は死罪に当たります。（この男は自分を）神の子と自称したからです。」

→ユダヤ人指導者たちはイエスが神と等しい者であると主張したため非難した（ヨハネ 5:18、10:33）。指導者たちはイエスを神ではなく、人間に過ぎないと思っていたので、死刑に相当する神への背信（冒瀆）を犯していると言った。

08 ピラトは、この言葉（→イエスの厳粛で権威に満ちた主張やユダヤ人たちの証言等）を聞いてますます恐れ、09 再び総督官邸の中に入って、「お前はどこから来たのか」とイエスに言った。

しかし、イエスは答えようとされなかった。

10 そこで、ピラトは言った。「わたしに答えないのか。お前を釈放する権限も、十字架につける権限も、このわたしにあることを知らないのか。」

→ピラトは、自分にはイエスを救う力があると、イエスに告げている。

11 イエスは答えられた。

「神から与えられていなければ、（あなたの権限は限定的に委託されたもので）わたしに対して何の権限もないはずだ。だから、わたしを（十字架刑にするために）あなたに引き渡した者（→ユダ、カイアファ、あるいはサタン等々）の罪はもっと重い。」

12 そこで、ピラトはイエスを釈放しようと努めた。

しかし、ユダヤ人たちは叫んだ。「もし、この男を釈放するなら、あなたは皇帝（→ティベリウス・カエサル）の友ではない。王と自称する者は皆、皇帝に背いています。」

→ティベリウス・ユリウス・カエサル（＝ローマ皇帝）は、ローマ帝国の第2代皇帝（在位：AD14～37年）。初代皇帝アウグストゥスの養子。養子となる以前の名前は実父と同じティベリウス・クラウディウス・ネロ。

→ユダヤ人たちは①②の理由でピラトを追い詰めた。

①自分を王とする者（イエス）はカエサルに背く罪である。

②イエスを釈放することは、①の罪に加担したことになる。

